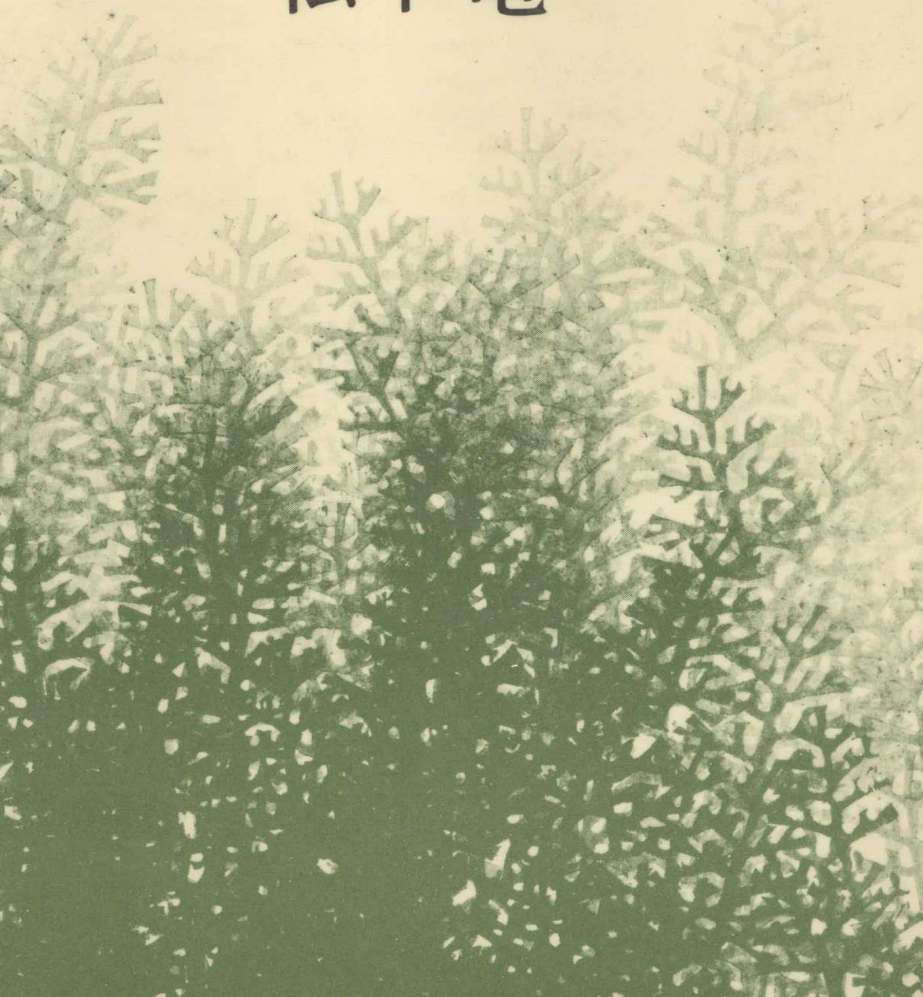
檜の山のうたびと

松下竜一



檜の山のうたびと

松下竜一

松下竜一（まつした・りゅういち）
1937年大分県に生まれる。作家。著書に「豆腐屋の四季」「風成の女たち」「暗闇の思想を」などがある。

槍の山のうたびと——歌人伊藤保の世界

1974年9月25日　初版第1刷発行

著　者　松下竜一
発行者　井上達三
発行所　株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
電話東京（291）7651（代表）
振替　東京4123
郵便番号　101—91

© 1974 松下竜一
1095—82068—4604

明和印刷・鈴木製本
Printed in Japan

目

次

一……3
はじめに……輸送列車……父母……弟妹……歌のはじめ
二……33
労働奨励金……大楓子油……阿蘇……妹の結婚……光る眼ん玉……相聞
三……65
祈り……菊池恵楓園……稚な妻……子のわれになし……詔勅
四……96
重態……まめやかな妻……民主化の波……「仰日」完結
五……126
短歌至上……妻と治子と……「仰日」刊行……極まりて嘗む

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

六……159
変貌……訴え……神よりも政治……黒髪小事件
七……192
藤本松夫事件……救援運動……ライと呼ばず……
「未来」参加
八……220
檜の森……老いに入る……盲導鈴
九……248
白き檜の山……いのちを奮い……空墓……危篤……死、唐突に
後記……289

檜(ひ)の山のうたびと

——歌人伊藤保の世界

うつせみのこの世にありて不思議なる光を放つ歌のかずかず

斎藤茂吉

一

――はじめに

〈癩文学〉という特殊な呼称が生まれたのは、北条民雄の作家活動によってであった。昭和十一年二月号「文学界」に発表された「いのちの初夜」は、文壇を越えて社会に衝撃を与えた。映画化もされた小川正子の「小島の春」が昭和十三年刊、明石海人の著名な歌集「白描」が昭和十四年刊であることを並べれば、昭和十年代前半はまさに〈癩文学〉が世を衝撃した一時期であった。それをブームと呼ぶならそれは短いブームであった。健康な世人は、肉体の病み崩れていく極限世界にいつまでも視線をそそぎ続けはしなかった。

最初の衝撃の短いブームが過ぎたのちも、むしろのちにこそ多くの癩療養者が、世人の注目の外で文学に魂の叫びと祈りをこめ続けて来た。伊藤保は、その代表的な一人であろう。歌壇一部での高い評価を除けば、伊藤保は無名の存在で埋もれようとしている。それは彼の作品の非力ではなく、〈遅れて来た者〉の不運に過ぎない（彼の第一歌集「仰日」の刊行は昭和二十五年である）。

むしろ私たちは、北条民雄や明石海人が緒を展いた癩文学が、伊藤保によって大きく深く集成されたと評価すべきではなかろうか。

ここでしかし、私は安易に〈癩文学〉などという呼称を受け継ぐべきではあるまい。伊藤保は歌人であって、ライ歌人ではない。正岡子規が歌人であって、肺病歌人とは呼ばれないことと同様に。

今、もはやこの病気は治癒するのであり、療養者は社会復帰出来るのである。永かった業病の歴史と偏見のしみついた癩という呼称は捨てられて、今この病気は菌の発見者にちなんでハンセン氏病と呼ばれる。そして二十年後には、この病気は国内でほぼ絶えるだろうと医学は予言している。

かつて不治の業病ゆえに死を背負うて文学に賭けた癩療養者の気魄が、今のハンセン氏病療養所からおのずから喪われ来たのは、文学というものの持つ性格の皮肉であろうか。そのことを考えれば、伊藤保は多分ライ園と呼ばれた特殊世界からの最後の文学者であったのではないか。

「定本・伊藤保歌集」を歌友花野秀子さんから貰ったのが、正確にはいつのことであったかよくわからない。発行間もなくであったろう。発行は昭和三十九年十一月十六日である。白玉書房刊行、限定五百部の内、私の所有は第0号となっている。限定部数外に作られた余分本ということであろう。

私は当時、ただ一人で指を折っては短歌を作り、新聞歌壇にのみ投稿していたので、同じ投稿仲間の友が、この千二百円の歌集を贈ってくれたのであった。その縁がなければ、私はついに伊藤保の名を知らなかっただろう。短歌作りの真似事をしながら、しかし一冊の歌誌も読まぬ不勉強者の私であった。

歌人伊藤保が、いわゆる歌壇世界でどのような位置を占めているのかいないのか、まるで知らぬままにひらいたその一冊の歌集が、三十歳前の私にいきなりな衝撃を打ちつけて来たのであった。

そして三十五歳になった今、私はこの歌人の生きた軌跡を求めて、熊本県菊池郡合志町国立療養所菊池恵楓園へと、初めての出発をした。カバンには「定本・伊藤保歌集」一冊と、これから書き入れで埋めていくはずの大学ノート一冊が入っているのみであった。他になんの資料も、私にはなかった。昭和四十七年三月八日のことである。

菊池恵楓園の所在も私は正確には知らず、熊本駅から菊池温泉行きのバスに乗り、菊池駅に降り立つとそこでタクシーを求めた。私はタクシーの運転士に行先を告げる時、少しためらった。運転士に拒否されるのではないかと危ぶんだのであった。運転士は、こともなげにうなずいて出発した。

私のハ氏病療養所に対する知識というものは、それほどに時代錯誤なものであった。私の内なるライ及びライ園への認識は、根本的には北条民雄のリアルな作品から焼きつけられたのち、何の追加も変更もなされていなかったとさえ、いわねばならない。園の療養者たちと、どのように接触するのか、不安がない訳ではなかった。その不安を押さえて、なお療養所への道を辿る私の心を支えていたのは、滑稽に聞こえるかもしれないが、作家としての矜持以外のものではなかった。

タクシーは、バスで辿った道をずんずんと引き返し始めた。尋ねてみると、恵楓園への入口は御代志という駅であって、私は半ば以上も行過ぎていたことを知った。

訪ねた園では、カウンセラーのU氏がこともなげに私を面会室に案内してくれた。療養者と接することの注意などひとこともなく、私も敢えて尋ねることが恥ずかしく、ただ注意のないということがつまりは特別な用心など要らぬことを意味するのだろうと思っただけであった。

面会室には、内海俊夫、青木伸一、畑野むめ、森本芙美子の諸氏が来てくれた。いずれも伊藤保生前の歌友であり「定本歌集」の刊行会メンバーである。面会室は横長いテーブルで仕切られてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

て、私と諸氏とはそのテーブルを挾んで向かいあった。

その夕べ、園長の好意で私は職員宿舎に引き揚げたが、高い檜の並木の道から入りこんだ宿舎は静かであった。園の方から、石焼芋の間延びした売声がひびいて来るのを聞きとめながら、「園の人があきなっているのですか？」と、宿舎の世話をしてくれる婦人に私は尋ねてみた。「いいえ、町から売りに来るのですよ」との答が返って来て、それをきっかけにいろいろ尋ねてみて、もはや今では園の療養者もほぼ自由に町に出て行けるし、町の人も園内に気軽に来てあきなったりすることを、私は知らされた。

私は寝がけに、テレビの上に置かれていた薄いパンフを読んでみた。私がライについて、文芸作品でなく医学知識として読んだのは、実にこの薄いパンフが初めてのことであった！

らいは一種の細菌によって発病する病気で、本病に罹っている人々によって健康な人々は感染させられるのである。十中の八九まで、この細菌は皮膚や鼻の粘膜の擦り傷から体内に浸入するものと想像されている。併しながらい患者はすべて伝染性とは限らない。また伝染性のらい患者と接触した人は皆本病に罹るとも限らないのである。伝染性の患者は特に子供に対して危険であるけれども、大人に対しては滅多に危険ではないと現在我々は断言することが出来るのである。大人に就いては、患者と健康者との夫婦の場合でも伝染することは滅多にない。世界中に散在する沢山のらい療養所においては、医師、看護婦及び一般の職員達が今日まで毎日患者達と接触して来ているが感染したということは極めて少ない（注、日本では一例もない。傍点筆者）。

翌夜、もう私はテーブルで仕切られた冷えびえとした面会室を捨てて、森本芙美子さん方の部屋で、皆と炬燵を囲んでいた——

本文に入る前に二点の断りをしておきたい。ライという呼称が第一点である。前文でも触れたように、ライ病がハンセン氏病と呼び変えられるには、プロミンという特効薬の出現で驚異的治癒の新時代に入ったという背景があった。菊池恵楓園にプロミン第一号が届いたのが昭和二十四年であった。これ以後、もはや不治の業病ではなくなり社会復帰も出来るのだという状況のもとに、過去の偏見のつきまとったライという呼称を捨てて、ハンセン氏病と呼ぼうということになったのである。

私がいまさら、文中に過去の死語であるライの文字をちりばめて本稿を進めることは、療養中の人たちに不快を起こさせるだろう。しかし伊藤保の生きた軌跡を追求していく上で、それはやむを得ないことである。伊藤が生きたのは、ライと呼ばれた時代であり、ライ園と呼ばれた世界であった。彼自身、歌中にライの文字を使っている以上、この呼称を避けることは、彼の生きた現実を直視することにならない。ライの文字を敢えて許してもらわねばならないのである。業病という言葉を用いた意味も、同様に理解していただきたい。

伊藤たち歌人が自らの短歌の中に意識的にライの呼称を避け始めるのは昭和三十一年頃からである。従って私も、その時点以後の記述においては注意深くライという呼称は避けるであろう。

断りの第二点は、これから本稿で私が追求しようとするのは、伊藤保の歌評ではないということ

である。私も幾年かは作歌経験を持つとはいえ、残念ながら一首の韻律の中に幽かにふるえる助詞一語の働きまでを感受するほどの歌人的稟質とは、ついに無縁に終った。そのような私に歌評など出来るはずもない。

私がこころみようとするのは、彼の〈私小説〉ともいうべき短歌作品を手がかりとして、彼の生きた世界を知り、彼の生きかたを知ろうとする作家的探求である。

——輸送列車

一度(ひとたび)は世に出づることのあらむかもわれ商(あきなひ)の書(ふみ)手放さず

〈輸送列車にて〉という小さな頭註を付したこの一首で、伊藤保の第一歌集「仰日」は始まっている。歌人伊藤保の世界の出発である（「定本・伊藤保歌集」は、第一歌集「仰日」第二歌集「白き檜の山」未完歌集「霜天集」をおさめる全歌集である）。

十九歳の多感な文学青年がライを宣告されて、隔離の別世界へと否応なく故郷から追われて行った日の記録として、歌集にこの一首しかとどめていないことをどう考えればいいのだろう。

一人の青年の運命を決定づけた昭和八年四月二十八日の〈拘禁〉の旅が、この程度の短歌詠嘆で位置づけられることで、もう私たちは第一歩から、彼の踏みこんで行かねばならなかった現実を見落してしまいそうだ。

〈私が輸送列車に送られて祖母と幼弟とを残し此の療園に参りました時、高原は楙(くぬぎ)の花房がしきり

に揺れておりました〉という「仰日」巻末記の書き出しもまた、惨めな屈辱の現実が、櫟の花房揺るる抒情にすり変えられてしまっている。

〈輸送列車にて〉という頭註は、さりげなく小さい。

後年、菊池恵楓園に輸送されて来た内海俊夫によれば、他の客車は満員であったが、輸送患者三名だけはガランとした一台の客車に隔離され、両入口には警官が張番に立っていたという。駅毎で、事情を察した人々の恐怖の視線を遠くから刺すように感じ続けたという。輸送列車とは、そのようなものであった。

しかも、その屈辱の隔離客車に、十九歳の保は十二歳の妹勝代と寄り添うて、未知の世界への出発に怯えていたはずなのだ。歌集をひもとく限りでは、彼が幼い妹と共に送られて来たことはわからない。ただ私は、彼が歌集に編みこまなかった歌屑を園内文芸誌「檜の影」から拾うことで、その事実を知るのだ。

四月廿八日郷里をいでて妹と二人療養所に向ふ

今日ひと日の吾れと思へば惜しまれて花瓶に花を活けにけるかも

この朝妹に晴れ着をきせくるる叔母も寂しく居たまふらしき

貧しくて常ありへつつたまたまに晴着をきると喜ぶ妹は

時折りに巡査来りてそれとなく療養所のことを吾に聞かせし

（「檜の影」昭和八年十一月号）

既に昭和二年に父は逝き、母は前年亡くなったばかりであった。ライを宣告されて療養所に向か

う兄妹を送るのは、一人の弟（勝代には兄にあたる）と祖母と伯母であった。祖母は父方の祖母で、祖父は早く亡くなっていた。伯母は父の姉にあたる人で、歌中に叔母とあるのは間違いである。両親を喪った伊藤兄妹を、隣町に住むこの伯母が何かと面倒をみていたのであろう。のちには、祖母もこの人にひきとられている。

残念なことに、この伯母夫婦もその子にあたる人も既に亡くなっていて、昭和八年の療養所行の模様をつぶさに知る手がかりは、もう失われている。歌のみで察するしかない。

伯母は、十二歳の少女の寂しい門出を、晴着で飾ってやったのだろう。幼い勝代は、無邪気にそれを喜んだ。そうしている間も、巡査は監視に来ていたのであろう。

かつて永く、ライ病者は警察の管轄で扱われた。医師は患者を発見すると警察に通報し、警察は直ちに否応なしに患者を輸送トラックや列車に送りこんだ。「らいからの解放」（大竹章著）によれば、罪人の如く手錠をかけて連行された例もあるという。

十九歳と十二歳の兄妹が輸送列車に送りこまれたのも、警察の手を経てのことであったろう。〈故郷をいま離るなり汽車の窓菜の花畑のつづくを見たり〉と、幼い勝代は素朴な歌をポツリと作っている。たまさかに着た晴着を喜びながら、しかしどんな世界に入って行くのか理解も出来なかったろう十二歳の少女を想うとき、こんな一首にも私の感慨は深い。

詠嘆をこめた冒頭の一首が、背後に塗りこめて隠してしまった現実を、しかと掘り起こすことから、私は伊藤保の世界に改めて踏み込んで行かねばならないのだ。

兄妹が送られて来た九州療養所（のちの菊池恵楓園）は、熊本市の北方約十キロメートル、黒石原と称する高原地帯の一角にあり、海抜八七メートルである。東に阿蘇の噴煙を望み、北へ鞍岳、八方嶽、西南に金峰山を望み、環境は雄大で豊かである。

おもむろに夜は明けゆきて阿蘇山にのぼる煙をみればしづけき

「仰日」巻頭第二首目である。これにも〈隔離室にて一夜〉という小さな頭註がついている。〈苦悩のうちに一夜明けて仰いだ阿蘇山の白煙噴く悠久の山容は印象的で魂に沁みてくる様でありました〉と「仰日」巻末記は記している。

この一首で、あるいはこの巻末記の一節で十九歳の多感な青年のライ園第一夜の心象が語り尽されているなどと、誰が信じることが出来よう。余りにも寂かにととのい過ぎて詠われ語られている。

ここで私は、ライ園第一夜を精魂をこめて「いのちの初夜」に描き尽した北条民雄との対比を思わずにいられない。北条民雄が東京府下の全生病院に入院したのは昭和九年五月十八日であり、満十九歳であった。九州療養所と全生病院と、入所先は異なるとはいえ、わずか一年の差で、しかも共に満十九歳の入所であったことを思えば、北条がその第一夜の懐悩をきりきりと作品に刻みこんだに比し、伊藤がその歌集にこんな寂かな一首をしか残さなかったことの対照は、余りにもきわだっている。

ひとつには、伊藤がその時点でまだ確とした短歌作者ではなかったということを考えねばなるまい。彼が短歌作者として意識的な出発をするのは、その一カ月後である。〈輸送列車にて〉も〈隔

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com